

地域社会における信頼の創出とコミュニケーション

～うみラボと i g o k u の実践から～

@日本広報学会 研究発表全国大会

自己紹介

小松理虔 こまつ・りけん

1979年いわき市小名浜生まれ

法政大学文学部史学科卒、福島テレビ報道部記者を経て

上海で日本語教師、雑誌編集者、通訳などを経て帰国

木材商社やかまぼこメーカーで営業・広報などとして勤務したのち

2015年に独立し、「へきれき舎」の屋号で

さまざまな地域活動、執筆活動を行なっている

いわき海洋調べ隊「うみラボ」の活動







漁獲物検査票	
品名	タラシ
数量	1尾
重量	11.05
検査日時	
検査場所	
検査者	







食イベント「さかなのば」の主催





うみラボの実践

知りたい、調べたい、という不純な動機が「独立性」を担保する

あくまで住民主体（だが科学的な根拠をしっかりと担保できる）

科学一辺倒ではない伝え方もできる

素人集団なので「最初は不安ですよね」と寄り添える

メディアが味方についてくれる

賛成派も反対派も「呉越同舟」できる

脱線が許される（放射線防護から海の魅力発信へ）

体験できる「場」があったことでコミュニティになる

結果としてセカンドオピニオンとして機能

必要なのは、「正しく理解すること」ではなく
当事者性の限定ではなく、当事者性の拡張
いっしょに、福島のを考えてもらう、体験してもらう仲間をつくる

より楽しい、おもしろい、おいしい、興味深いという動機

素人目線のふまじめな情報発信＋言葉えらび

学ぶことの楽しさを伝えるサイエンスコミュニティ

「場」というメディアを通じて伝える



地域福祉メディア「いごく」の制作

TAKE FREE
紙のいごく vol.5
Magazine for Iwaki Maetsu

特集 feature is
認知症放言
山荘のんぼんじやあつ

igoku



やっぱり、家で死にたいな

igoku



死んだらやだよ

紙のいごく
Magazine for Iwaki Maetsu
igoku



特集 いごくフェスで
死んでみた!

紙のいごく
Magazine for Iwaki Maetsu
CONTENTS
●地域包括ケアって
●写真特集 平岡 至

<https://igoku.jp>

いごくとは、
いわき市でスタートした「地域包括ケア」の
取り組みの「理念」を表す言葉。「動く」と
いう言葉のいわき市、人が健康で、幸せに
生き生きできるような、さまざまな企画、
情報発信を展開しています。

いごくの魅力を伝える雑誌

igoku

紙のいごく
Magazine for Iwaki Masters

vol.4

2018
秋

TAKE FES

<https://igoku.jp>

特集：
igoku Fes 2018
ライブレポート

写真特集：
老いの魅力 × 平間至

いごくca.

いごくca.でスタートした「地域包括ケア」の取り組みの“理念”を表す言葉、「絆」という言葉のいよきか、人が健康で、幸せに、より生きることができるように、さまざまな企画・情報発信を続けています。



My igoku fes. 2018-11-17

TAKE FREE

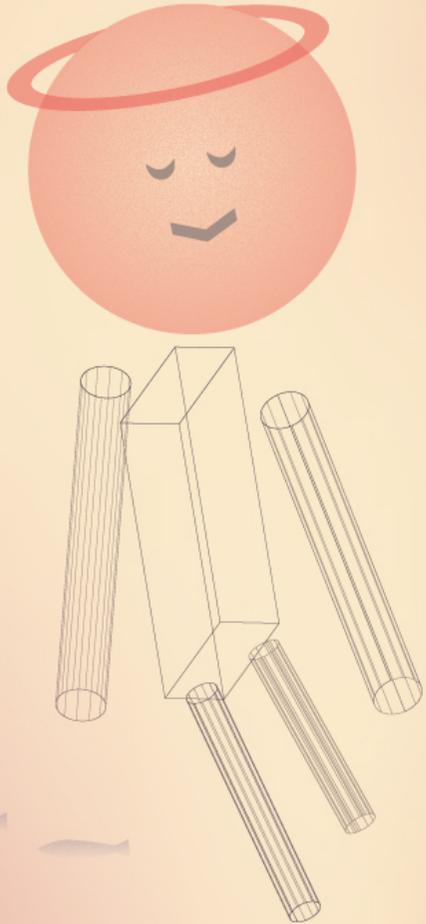
Magazine
for
Iwaki
Masters

いわきの地域包括ケア、
いごいでます！

igoku

いごくとは、
いわき市でスタートした
「地域包括ケア」の取り組みの
「理念」を表す言葉。
「動く」という言葉のいわき弁。
人が健康で、幸せに、
より長生きできるように、
さまざまな企画、情報発信を
展開しています。

死に様。



いわき人の

紙のいごく

vol. 11

What does death look like for Iwakians? vol. 11



新聞を読んでいたのけど、いわき市主催「吉野せい賞」の特別賞に菅野謙さんの名前があったからだ。彼女は私たちが編集部の第一号取材先。そして記念すべき創刊号にでかどかとポトリートを掲載させていたのだ。あの小川町のカリスマヨギである。

授賞式の会場は若しくは前回の撮影を行った菅野心平文学記念館であった。あの時と同じ場所でもたポトリートを撮りたい。さっそく訪問して申し込んだ。ひよいと登ってきかせてくれた。「どこまでも登れるよ」とやさしく微笑むこの御婦人は御年九十六歳である。歴代受賞者最高齢「年だからさほうびだ」と謙遜していたけれど、粉れもない力腰が正しく評価されたはずである。

「百歳まで生きようと思ってたけど気がついたらあと四年」と笑う謙さんに元気の秘訣を伺うと「まずご飯を食べる。そして動く。人間は動物だ。動く物なんだ」と即答。いごく！感無量です。

謙さん。あらためて受賞おめでとうございませう。またしても一本取られました。などと書いていたら、なんと次作はもう書きあがっていて応募先を探しているらしい。いやはや、その「いごき」に私たちはいつも驚かされるばかりだ。

文：佐野清三郎 写真：渡邊隆一













i g o k u の実践

当事者も専門職も専門家も研究者もいない

あくまで外部の目線で地域や福祉に関わる

福祉や介護の「こうあるべき」を脱する発信

役所目線の「上から発信」がない。むしろ下から、無知から

思考のプロセスを開示することで、読者に伴走できる

体験できる「場」があることで、コミュニティに変化する

脱線そのものを発信する（当初の予定通りには進まない）

当事者ではなく社会の側にメッセージを伝えられた

結果として福祉内の人たちにも面白がってもらえた（内と外の架橋）

課題：福島県産の海産物に対する不安や風評がなくなる

本来目指されるべきコミュニケーション

本来目指されたコミュニケーションの失敗
誤配？

専門性
当事者性
行政的
プロ的
目的先行型
課題解決型
○○べき

- ・安全性の発信（安心安全、おいしい）
- ・測定データ・線量データの公表
- ・放射線について知ってもらう、学んでもらう
- ・放射線防護学の普及
- ・正しい情報を理解してもらう
- ・漁業者の声を伝える
- ・科学者や専門家の見解も伝えていく

- ・釣りって楽しい、釣れて楽しかった
- ・魚っておもしろい、ますます知りたい
- ・イチエフ見てみたい
- ・酒がうまい、魚もうまい
- ・みんなで飲んで楽しい
- ・わからないものがわかるっておもしろい
- ・行ってみた、やってみた、体験者の言葉

非専門性
非当事者性
民間・素人
実践的
理念共有型
部外者の協働
○○たい

当事者的
事に当たる者

共事者的
事を共にする者

目標：風評払拭、正しい理解

さまざまな広がり
コントロール不可

- ・正しい情報を伝えようとする動き
- ・知識を有する者から有していない者へ
- ・当事者や専門家の言葉の発信
- ・“先知恵”的なアプローチ

- ・体験と実践を通じて学び、修正
- ・共に学び合うフラットな関係
- ・体験者の学びのプロセスを発信
- ・“後知恵”的なアプローチ

共事的であることは本来メディアの役割

メディア自身が強い当事者性を持った（特に県内メディア）

ふまじめさの許容（正しさによる不寛容）

目的遂行ではなく、共事漂流できる強み

コミュニケーターの不在（広報的知見の足りなさ）

地域の人たちが「なにに不安を感じているか」の想像力

→ 「ローカル」的なものに対する解像度が低い

上からでも、下からでもなく、横から、共に

プロジェクトからコミュニティへ（実践者を育てること）

ローカル広報人材を育てることが、災害に強いまちづくりになる